

歴史民俗資料としてみる『風俗画報』の再検討

—挿絵に描かれた様々な事物の分析から—

石井和帆

ISHII Kazuho

神奈川大学大学院 歴史民俗資料学研究科博士後期課程

【要旨】『風俗画報』とは、明治・大正期に東陽堂から発行された画報雑誌である。明治22年2月から大正5年3月に最終号を出すまで、27年間にわたって通巻478号を数え、増刊号を合わせて518冊ほど刊行された。

絵画や写真を重視した同書は、当時の風俗を研究する上で、歴史民俗資料として見逃すことができない文献である。だが、それにもかかわらず、同書は安定した評価をされておらず、同書に関する研究も多いとはいえない。

本論文は特集号である『新撰東京歳事記』の上下巻を対象に、挿絵の中で雑多に描かれた明治期の風俗や事物について分析・読解をして歴史的考証を行う。すなわち、無数に描かれた事物を文献や写真資料などと比較検討を行い、『風俗画報』が当時の生活文化や歴史を知る上で有効な資料であることを実証することを試みるものである。

主題目以外の事物に着目して分析すると、描かれた人物の姿態や風景は当時の時代を反映していることが分かると共に、描かれていない事物も明らかになる。洋装姿の人物が極端に少ないことや、寺社の境内にある常灯明に刻まれた文字が挿絵に描かれていないこと、行楽地における移動手段である人力車が写真と挿絵では異なることなどが明らかになった。

以上のことから、絵師である山本松谷は演出のために画面構成を変えていることは確かであるが、描かれた事物については時代を反映したものだとは結論づけることができる。

演出のために描かれていない事物も存在し、事物の姿態が微細に描かれているために印刷した際に潰れてしまい、確認できない事物も存在するのだが、当時の生活文化や歴史を知る上で『風俗画報』が有用な資料であることは明確である。

Revisiting *Fuzoku Gaho* as a source material of history and folklore

— From an analysis of the minutiae depicted in book illustrations —

Abstract : *Fuzoku Gaho* was a magazine dedicated to genre scenes published by Toyodo from February 1889 (Meiji 22) to March 1916 (Taisho 5). Over a period of 27 years, it ran 478 consecutive issues plus extras for a total of some 518 volumes.

The journal prominently featuring pictures and photographs ought to be a major source material of history and folklore studies covering the customs and mores of Japanese society in its early years of Westernization. Yet assessment is mixed and little research has been devoted to the publication.

This paper analyzes, interprets, and conducts a historical investigation of the assorted mores

and minutiae of the Meiji period depicted in book illustrations, with a focus on the two-part special issue *Shinsen Tokyo Saijiki*. By drawing a comparison between the countless trifles portrayed and other literary and photographic references, it seeks to demonstrate that *Fuzoku Gaho* is a valid source material of the history and culture of everyday life in late 19th century Japan.

An analysis of the fine details, other than the main subject matter, suggests that gestures and settings reflect the circumstances of the times. Moreover, it reveals what is *not* depicted. For instance, there are extremely few figures in Western attire. Writings on the altar lamp at a Buddhist temple or Shinto shrine do not appear in illustrations. And rickshaws, a means of transportation in holiday resorts, differ between pictures and photographs.

All of this demonstrates that the illustrator, Matsutani Shoun, modified his compositions for effect. One may conclude, however, that the details of his work are nevertheless a reflection of the times.

Certain minutiae are omitted for effect, and others are rendered so intricately that they have vanished in the printing process and are no longer visible. This much is beyond question. Yet clearly *Fuzoku Gaho* is a valuable source material for gaining insight into the history and culture of everyday life in Japan at the dawn of modernization.

はじめに

写真が存在しなかった、あるいは写真の技術が乏しかった時代の生活文化を知るためには「絵」、
「図」が極めて最適である。文字として残されてきた史料だけでは、当時の生活をイメージすることに限界がある。我々は何かをイメージする際に、自身の経験や知識を呼び出し、想像をする。文字の史料だけでは、未知の経験を「像」として呼び出すことができない。文字としての史料に加えて、図像化された資料は極めて有用である。

近年、このような図像資料は研究者のみならず、博物館などの社会教育施設に来館する人々の学びや理解を助けるために広く利用されている。また、学校教育で扱われている教科書には生徒の理解を助け、イメージし易くするために図像が挿絵として収録されている。図像資料は我々にとって身近な存在であり、過去の生活文化や歴史を学ぶ上で必要不可欠であると考えられることができる。⁽²⁾

だが、図像資料には留意すべき問題点も多いことは事実である。それは描かれた図像が必ずしも写実的に写しとられたとは限らないためである。何かを描く際に、描き手が対象を視覚によって捉え、一度再構築を行って支持体⁽³⁾に出力する。この一連の流れの中で、描き手の意思によって再構築され、出力された図像の正否は不明である。また、写実的である場合も、描き手の技術によっては細部まで克明に描かれない場合もある。

このように描かれた図像の正否を分析・読解をする研究がなされなければ、実用的な研究資料や教育教材になるかどうか判断することができない。研究資料や教育教材としてある特定の図像資料が利用され、活用されるためには、まずは学術的に図像資料の研究を進めなければならないだろう。つまり、図像資料を分析・読解し、資料として再構築し、図像の「資料化」をする必要があるといえるだろう。

「絵」の資料化という点で、偉大な功績の一つとして渋沢敬三（以下渋沢）の『絵巻物による日本

⁽⁴⁾ 常民生活絵引』に触れる必要がある。渋沢は「字引とやや似かよった意味で、絵引が作れぬものか（渋沢 1954：8）」と述べ、中世絵巻から描かれた事物や行為を抽出し、それに番号を付し名前をつけた。絵引が登場することで、図像が人々の生活文化を知るための歴史民俗資料へと価値が高められた。

このような「モノ」に着目する渋沢であるが、一方で民俗学の祖である柳田国男（以下柳田）の有名な提案に民俗資料の三分類というのがある。それは「有形文化、言語芸術、心意伝承」である。この中で渋沢の資料学と深く関係するのは有形文化である。ただ、それは物質文化のことではなく、人々が行為として示し、目で見ることができるといえる事象を指しており、民俗学の内容の大部分を占める。モノに着目する渋沢とコトバや行為に着目する柳田では資料に対する観点が異なる。

ただ、興味深いのは柳田が監修した『年中行事図説』には、図像資料が極めて多量に使用されていることである。同書を編纂するにあたって、本論文で扱う『風俗画報』に収録された挿絵を多数参考にして作成されていることは既に明らかとなっている。⁽⁵⁾ 柳田にとっても資料として図像は見逃すことのできない存在であったのだろう。

このように、図像は当時の庶民の生活文化や歴史文化を知る上で重要な資料であり、歴史民俗資料として大きな可能性を秘めているといえるだろう。そして、これらは研究者のみならず、社会教育や学校教育でより多く活用されるべきである。

本論文は、そのための契機として、渋沢から端を発した図像の資料化の流れを踏まえて、近代の図像である『風俗画報』の「資料化」について未熟ながら論じるように試みるものである。次章にて民俗学において、どのように図像の資料化が行われているのか、現状をまとめ、本論文の位置づけ及び研究目的・方法を明確にして論を展開するように試みる。

I 研究史及び本論文の研究目的・方法

(1) 民俗学における図像の資料化の現状

民俗学において、歴史や民俗を今日に伝える情報資料として図像を積極的に活用し、具象的に捉えるように試みたのは、先にも述べたように渋沢である。渋沢が編纂した『絵巻物による日本常民生活絵引』は主題目とは別に、絵巻に描かれた支配階級を除いた庶民の姿を切り取り、模写を行い、それぞれに番号を付し、行為や事物に名称をつけ、描かれた事物から絵引を行えるようにしたものである。

渋沢は凡例の中で、「模写せられた絵は絵巻物に見えた常民生活の描写せられた部分と、貴族生活の中でもそれが現代の常民生活に関連あるものを取りあげ、単に事物だけをぬき出して描くことをできるだけ避け、背景や行為の中に常民生活がうかがえるように描いた（渋沢 1964-1968：14）」と述べている。ここには渋沢の図像資料から読みとる視点ばかりではなく、図像資料の扱い方、読み方、読みとる方法、さらには図像の資料としての選択や資料化について示されている。

また、渋沢の『絵巻物による日本常民生活絵引』に影響を受け、絵巻物の主題目とは異なる背景の中に描かれてきた庶民の暮らしを取り出し、読解・分析を行った宮本常一⁽⁶⁾の研究も見逃すことはできない。

以上の渋沢の流れを継承し、図像資料を含む非文字資料の研究を大きく発展させた事業に、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム⁽⁷⁾「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が挙げられる。これ

は、2003年から2008年に神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所と日本常民文化研究所が主体となって行われた事業である。

これまでの文化研究は文字に記録された事象に関心が集中してきたが、文字に表現されない人間の観念や知識、行為は質量ともに大きいことに言及した上で、図像を含む三つの事象⁽⁸⁾について資料化する方法を開発し、蓄積し、分析して発信することを目的とした研究事業である。

図像の分野では、「図像資料の体系化情報発信」と題して、三つの課題に取り組んでいる。この三つの課題は、どれも『絵巻物による日本常民生活絵引』の研究を継承、発展させることを目的としている。

第一の課題は『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』⁽⁹⁾の編纂刊行である。多言語で編纂し直すことで日本内外のより多くの研究者が日本文化を研究し易くなったといえよう。『絵巻物による日本常民生活絵引』全五巻のうち、第一巻と第二巻をマルチ言語版として編纂、刊行を行った。第二の課題は『日本近世・近代生活絵引』⁽¹⁰⁾の編纂である。『日本近世生活絵引』北海道編、東海道編、北陸編の三冊を刊行し、近世の生活文化を研究するための資料化を行った。第三の課題は『東アジア生活絵引』の編纂である。中国江南編、朝鮮風俗画編の二冊として印刷刊行し、日本で作り出された絵引という編纂方式が、他の社会、他の文化でも可能であることを示した。

三つの課題はいずれも『絵巻物による日本常民生活絵引』を継承・発展する取り組みであり、図像の「資料化」という面で大きな成果を示している。だが、当初の課題であった『日本近代生活絵引』は刊行されておらず、近代図像の資料化については未だ課題を残しているのが現状である。また、『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』に関しても五巻のうちの一、二巻に留まっている。

これらの課題は残したが、2008年に神奈川大学21世紀COEプログラム（以下COEプログラム）「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は大きな成果を残し無事終了した。同年には、COEプログラムの5年間の研究成果を継承・発展させる組織として神奈川大学日本常民文化研究所付置非文字資料研究センターを開設した。同センターより2011年には『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』の三巻を、2012年には『日本近世生活絵引』の奄美・沖縄編を刊行し、今なお図像資料の研究の進展に向けて事業が継続されている。

(2) 民俗学における図像の資料化の課題

前節で明らかにしたように、近年、民俗学において生活文化などの諸側面を明らかにする上で図像資料を利用する動きが活発になっている。しかし、描かれた事物の事実確認や事実的な意味の確定という基礎的研究から始まり、図像の分析・読解の方法論の確立が盛んに行われる中で、図像の資料化を目指す動きが渋沢以降に再び現れたのは最近のことである。

COEプログラム、非文字資料研究センターと図像の資料化の研究は継承されてきたが、当初の課題であった『日本近代生活絵引』は刊行されておらず、近代図像の資料化については未だ課題を残している。このことに着目し、本論文の研究は近代に描かれた図像の分析・読解を行い、その描かれた図像の正否を歴史的に考証し、「資料化」を目指すように試みることを目的とする。

そして本論文で分析・読解を行う研究対象の資料は、冒頭の研究動機でも述べたように『風俗画報』という雑誌である。『風俗画報』とは、明治・大正期に東陽堂から発行された画報雑誌である。

明治22(1889)年2月から大正5(1916)年3月に最終号を出すまで、27年間にわたって通巻478号を数えた。ただ、増刊は号数に含まれていないため、総冊数は通巻号数より40冊多く、518冊となっている。絵画や写真を重視した『風俗画報』は、わが国のグラフ雑誌の先駆けとして当時の風俗を研究する上で、歴史民俗資料として見逃すことができない文献である。だが、以前から安定した評価を得ていたとはいえない。

勝本清一郎は「俗説の吹きだまりみたいなもの(勝本1962:19)」という厳しい評価をしているが、永井荷風は「明治時代の東京を知るには一番必要な資料(永井1950:367)」とし、相反する評価をしている。「今日の意味で学問的なものとはいえないが、明治の風俗、日本の風俗史の研究に逸することのできない文献(大藤1956:1)」という大藤時彦による評価が『風俗画報』の正当な評価であろう。

さらに、既存の『風俗画報』の研究は槌田満文によるジャーナリズム史において同書が果たした歴史的役割や垂流の画報雑誌との比較、同書の編集を中心に行った大橋乙羽、山下重民の取材執筆作業などの自伝や画報内に記載された体験談からの分析が主である。他方では、後藤雅子による挿絵・表紙絵を描いた山本松谷(以下松谷)の画業の考察や、先川直子による同書を用いた明治時代後期から大正初期にかけての女子服の改良の考察⁽¹²⁾が挙げられる。

それ以外は、同書に掲載された記事や図の引用、参考に留まっており、『風俗画報』自体に関する研究はあまり多くないことがいえるだろう。雑多に掲載された江戸風俗や明治期による新風俗の考証や研究が十分に行われていないのが現状だろう。

これらの現状、さらには「俗説の吹きだまりみたいなもの(勝本1962:19)」という厳しい評価に対して、描かれた図像の分析・読解をし、さらに歴史的な考証を行い、歴史民俗資料として『風俗画報』を再評価する必要があるのではないだろうか。さらに、分析・読解に加えて、『風俗画報』に収録された近代に描かれた図像を「資料化」し、歴史民俗資料としての価値を実証することが、研究資料や教育教材としての基礎を築くことにつながるだろう。

II 図像検証の必要性

(1) 挿絵の想像画に対する図像検証の必要性

では、『風俗画報』に対する厳しい評価が何故なされたのだろうか。挿絵の分析を行う前に明らかにしておこう。そのためには、当時の写真の技術やその写真の代わりとして盛んに描かれた“絵”の特性を理解する必要がある。

写真は、清国に宣戦布告した明治27(1894)年8月に、新聞や雑誌用のいわゆる網目製版の試作第1号が発表されるといった状態で、実用の段階では到底なかったのである。

日露戦争では写真師が従軍を許され、送られてきた写真は数々の新聞・雑誌を飾ったが、ほとんどが後方の部隊の移動や戦闘後の風景といったもので、その上、事後2週間、中には3週間以上もの時日を経たものであった。さらに、従軍画家の作品も多く掲載されたが、その画題となった時点から3ヶ月、あるいは半年後に発表されたものが多く、速報性が全くなく、報道性という意味では甚だ希薄なものであった。

以上の理由から、速報性のある石版印刷による挿絵を写真の代わりとして多数掲載した雑誌が『風

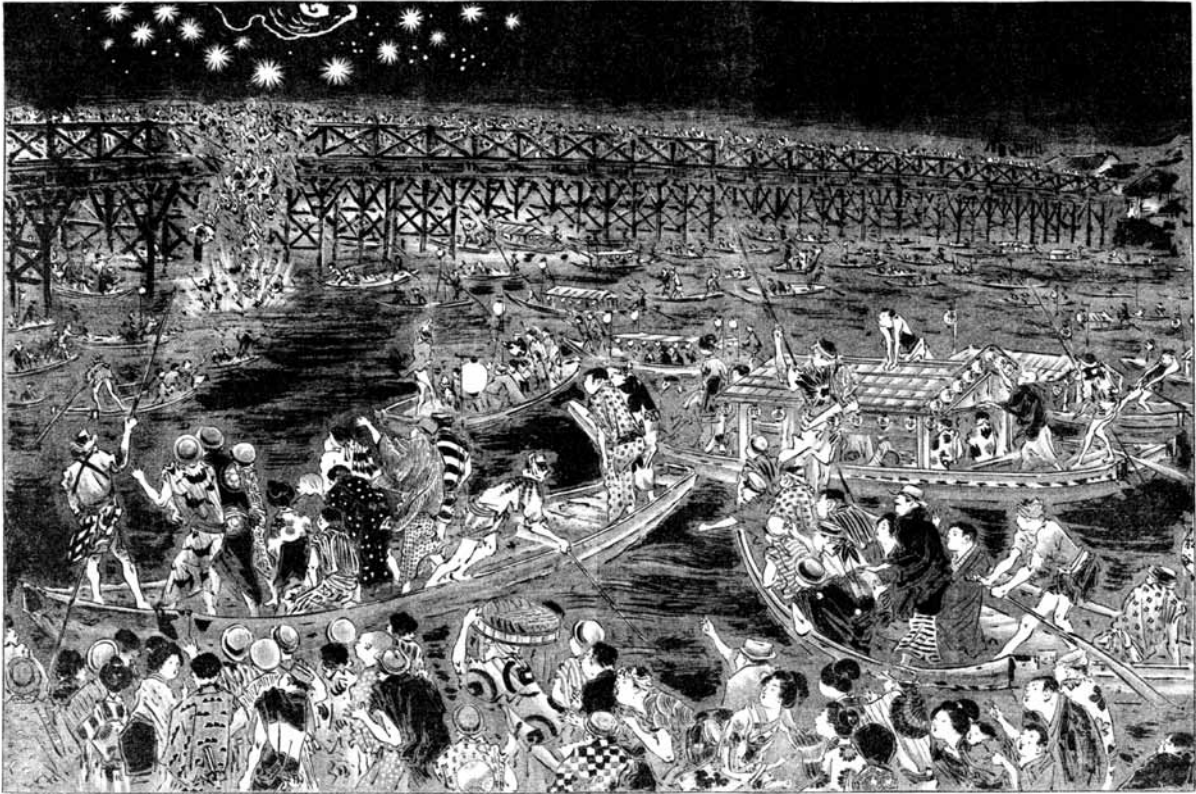


図1 山本松谷「東京両国橋欄干折損の図」『風俗画報』148号

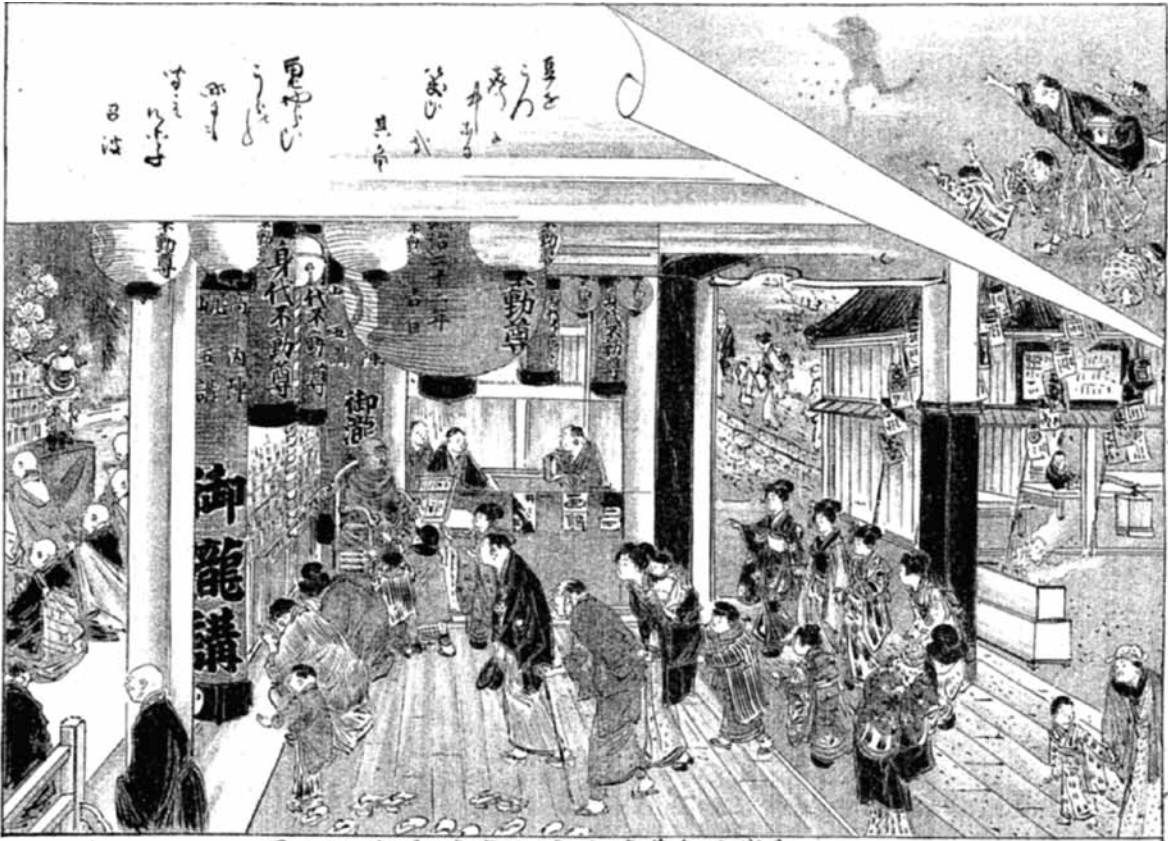
俗画報』であった。そして、速報性を重視し、ドラマチックに戦地や災害地の挿絵を多分に収録した同書が人気を博した理由の一つでもある。

しかし一方で、戦争図会や災害などの特集号の挿絵は、現地写真を手がかりにした想像画⁽¹³⁾であったと絵師である松谷自身が後に話している。さらに、明治30(1897)年9月10日発行の148号に掲載された「東京両国橋欄干折損の図」(図1)では、8月10日、川開きの花火見物で両国橋の欄干が折れ、死傷者を出した事件を取り上げている。松谷は現場に取材にいったものの、「橋の真ん中にもぐり込んで写生しようとおもったが、どうしても入れない。しかたがないから帰って、朝見ると何十人が欄干が折れて死んだという……(山本1956:111)」と述べている。

以上の点から、絵師が直接取材を行えなかった場合でも、写真や他の記事、伝聞等から想像して描いていたと考えられる。松谷の想像画は、速報性が人気を博した理由であるとうかがうことはできるが、写実的とはいえず真実を伝えきれていない部分があることは確かである。

(2) 絵師の画面構成に対する図像検証の必要性

では実際に現地取材を行った場合、松谷はどのように原画を作成していたのだろうか。松谷の子息である山本紘運は「あその風景はここに橋があって、これこれだと聞くと、それをまとめる才能はあったんだろうと思います。写生をしてきた絵は、もうちょっと刻銘に描くとか、町の様子を描いてきた場合は、看板から何から何までしっかりとしたものになっていますね。(山下、山本健二、山本紘運、槌田1991:10)」と述べている。「身代不動尊節分會十座萬遍修行の図」(図2)の余白右側に「明治29年2月写」のメモが書き入れられており、実際に現地取材に基づいて細部まで事細かに写し



身代不動尊節分會十座萬遍修行の図

図2 山本松谷「身代不動尊節分會十座萬遍修行の図」『風俗画報』157号



図3 山本松谷「神田小川町通の図」『風俗画報』195号

取っていることが見て取れる。

松谷自身も現地で写生をする際の様子を、195号の「神田小川町通りの図」(図3)について「(桶の籬屋が)ここを通るか、どこを通るかはわかりませんが、絵の位置で適当にもっていき(山本1956:115)」、「それ(猿まわし)を横手に立って写生したのだが、ただそれをここにもってくるか、馬に乗っている人をどこにおくかは考えました。(山本1956:115)」と述べている。

以上のことから、その場の風景を切り取り、空間性を写し取る写真とは異なり、一定時間内の人物の流れなども一枚の画面内に収める時間性も同時に含まれていることが分かるだろう。

そのため、限りなく真実を写しているようだが、絵師の判断で画面内の構成を変更できることを考慮すると、図像の資料としての価値を実証する必要性が見えてくるだろう。次章では画面内に描かれた事物を子細に分析し、歴史的な考証を行うことで、図像を“資料化”するように試みる。

Ⅲ 図像分析の具体的検討

(1) 図像分析の方法

今回の分析は、『風俗画報』の特集号である『新撰東京歳事記』の上下巻に限定して行う。刊行年は明治31(1898)年であり、『風俗画報』が最も隆盛を極めた時代でもある。また、収録された挿絵は全37図であり、これらの挿絵(表1)は全て絵師である松谷が描いている。そのため一貫して絵

表1 『新撰東京歳事記』収録挿絵一覧

	月々の行事一覧	四季の行楽一覧	寺社の縁日一覧
1月	一月一日百官参朝之図		水天宮縁日之図
	初卯の日亀戸妙義参の図		
	愛宕権現毘沙門天祭事の図		
	昆布注連縄の具にて兜を製するの図		
	消防夫出初式の図		
	日本橋新年の景況		
2月	身代不動尊節分會十座萬遍修行の図	向嶋梅屋敷の図	
	泉岳寺四十七士の墓		
3月	十軒店雑市の図	享和年間洲崎汐干之図	
	兒女雛祭の図	現今品川汐干の図	
			(目黒)摘草之図
4月	芝増上寺涅槃會之図	飛鳥山花見の図	
		向島看花の図	
		御殿山観花之図	
5月	十軒店幟店の図		
6月	下谷玉條天神祭禮の図	堀切花菖蒲の図	
	品川牛頭天王御輿洗の図	亀戸村路傍花菖蒲の図	
	南伝馬町天王神輿渡御の図		
	赤坂氷川神社大祭の図		
	御輿御出座の図		
7月	七月十日浅草観音四万六千日参詣の図		
	両国川開き図		
8月	回向院施餓鬼之図	稚園虫聞図	銀座地藏蔵前縁日の図 地藏□路入口の図
9月	芝神明宮大祭之図		
10月	翁忌の図		
12月	煤掃之図		
	歳暮交加		

師の意思を読みとり易いはずである。

以上の点を踏まえて、同特集号の挿絵に目を向けると、画題を表すモチーフやランドマーク⁽¹⁴⁾以外の事物も多分に描かれていることが分かる。いずれも絵師である松谷が当時目にした事象を率直に描いたもので、画題よりも気楽に写生していたことがうかがえる。このように描かれた画題とは別の項目、衣服や身につけている物、人物の様子などからも明治30（1897）年前後を知る手がかりとなり、貴重な絵画記録資料であるといえる。

ただ、挿絵が描かれる過程において絵師の思うように画面を構成できる時点で、画面内に描かれた事物の真实性は不確実であることは前章からも明確である。『風俗画報』が生活文化や歴史を考察するための資料となりうるためには、描かれた事物を文献や写真資料、他の図像資料と比較し、歴史的な考証を行うことで画面内に描かれた事物の正否を明らかにする必要がある。

それは、中世絵巻から描かれた事物や行為を抽出して資料化を行った渋沢のように、同特集号の挿絵から様々な事物の抽出を行う。そして、描かれた事物を子細に確認し、文献資料や当時の写真資料、他の図像資料などを用いて、資料性を実証すると共に、近代の図像の資料化を試みる。

本章ではあくまで分析に重きをおくため、分析による考察や明らかとなったことは次章で述べる。

(2) 事例1：被り物「歳暮交加」「日本橋新年の景況」「芝神明宮大祭之図」「初卯の日亀戸妙義参の図」「十軒店幟店の図」

まずは、図像に描かれている被り物を見る前に、明治期の被り物の流行に関する記述を見てみよう。

渋沢敬三編の『明治文化史 生活編』では、男性の冬用帽子の類について「高帽子すなわちシルクハットは礼式用である上に、和服にそぐわないので一般には用いられず、丸帽子すなわち山高帽子・中折類⁽¹⁷⁾が用いられた。⁽¹⁸⁾（中略）鳥打帽子も商家では、二十年頃から用いられ、三十年代から普及しはじめたようである。（渋沢 1979：63）」と記されている。

また、『東京風俗志』には「帽子はシルクハットは平常に用いられず、また日本服の上には不似合なり。平常は中山高鏢附の中折れを用ふ。（平出 1901：46）」とある。

以上のことから男性は山高帽子や中折れ、鳥打ち帽子を好んだことが分かるだろう。これらの被り物は『新撰東京歳事記』に収録された「歳暮交加（図4-1）」「日本橋新年の景況（図4-2）」などに見ることができる。図4-3・図4-4は山高帽子、図4-5は中折れ帽、図4-6は鳥打ち帽子である。これに加え、女性の防寒用として御高祖頭巾⁽¹⁹⁾（図4-7）を被った人物が至るところに見受けられる。『明治文化史 生活編』や『東京風俗志』にも、「婦人が防寒のために用いていた（平出 1901：48）」ことが記されている。さらに、御高祖頭巾を被った姿を写した写真（図4-8・図4-9）も数多く残されていることから、『新撰東京歳事記』の挿絵は当時の時代を写し捉えていたといえるだろう。

冬用帽子は以上の通りである。では、夏用帽子についてはどうだろうか。『明治文化史 生活編』では「外人の麦稈真田の帽子をみて製造に着手し、（中略）ついに十七、八年の頃にはニューヨークから我国麦稈買占すらあり、国内需要もまた非常に増加して、これに廉価なアンペラ帽子まで製造されるようになった。（渋沢 1979：64）」のように麦稈やアンペラ帽子についての記述がある。「芝神明宮大祭之図（図4-10）」を見るとこれらの夏用帽子を身につけた人物が描かれている。図4-11はアンペラ帽子、図4-12は麦稈である。時代や季節によって描かれた被り物が異なることが分かるだろう。

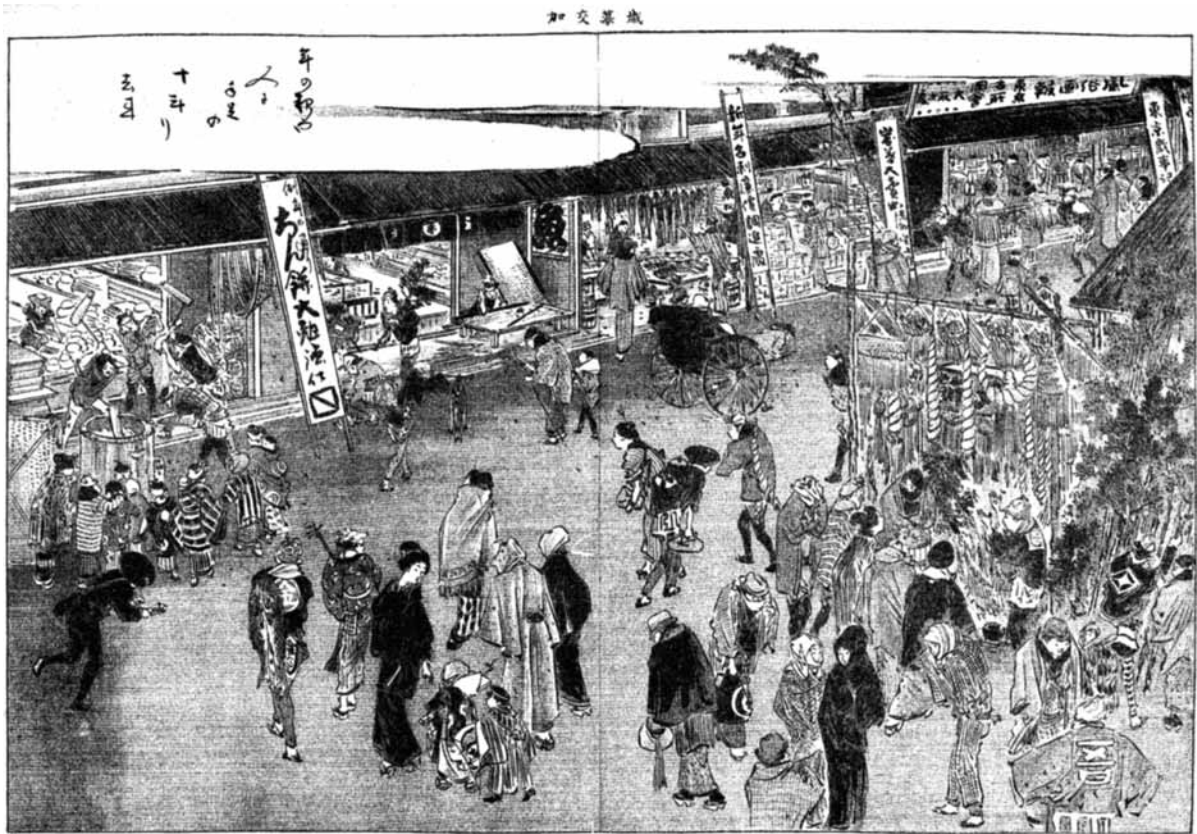


図 4-1 山本松谷「歳暮交加」『風俗画報』159号



図 4-2 山本松谷「日本橋新年の景況」『風俗画報』157号



図4-3 「山高帽子」「歳暮交加」『風俗画報』からトリミング



図4-4 「山高帽子」「日本橋新年の景況」『風俗画報』からトリミング



図4-5 「中折帽子」「歳暮交加」『風俗画報』からトリミング



図4-6 「鳥打帽子」「日本橋新年の景況」『風俗画報』からトリミング



図4-7 「御高祖頭巾」「歳暮交加」『風俗画報』からトリミング



図4-8 撮影者不明「お高祖頭巾の女性(12)」
年代未詳 長崎大学図書館所蔵



図4-9 撮影者不明「お高祖頭巾の女性(13)」
年代未詳 長崎大学図書館所蔵

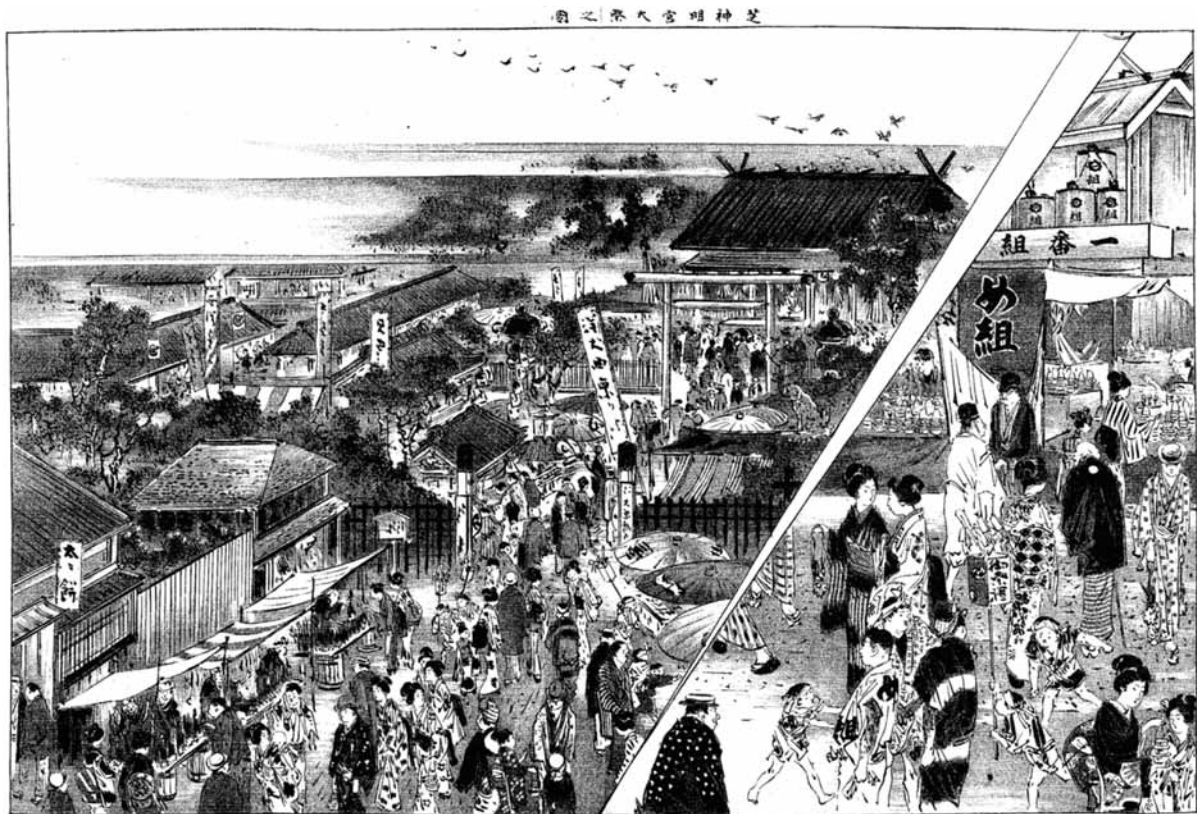


図 4-10 山本松谷「芝神明宮大祭之図」『風俗画報』159号



図 4-11 「アンペラ帽子」「芝神明宮大祭之図」『風俗画報』からトリミング



図 4-12 「麦稈」 「芝神明宮大祭之図」『風俗画報』からトリミング

次に、洋装の帽子であるシルクハットを挿絵の中から抽出しようと試みた。しかし、シルクハットと思われる帽子は『新撰東京歳事記』の挿絵の中には見つけることはできなかった。シルクハットは洋装と合わせるものだが、そもそも洋装の人物が描かれていることが少ないのである⁽²⁰⁾。

「初卯の日亀戸妙義参の図（図 4-13）」の左側手前のコートの人物（図 4-14）、「十軒店靴店の図（図 4-15）」の中央のフロックコートを着た男性（図 4-16）、「日本橋新年の景況（図 4-2）」の左端や手前の男性（図 4-17）などが洋装に身を包んでいる。しかし、帽子は全て山高帽子である。

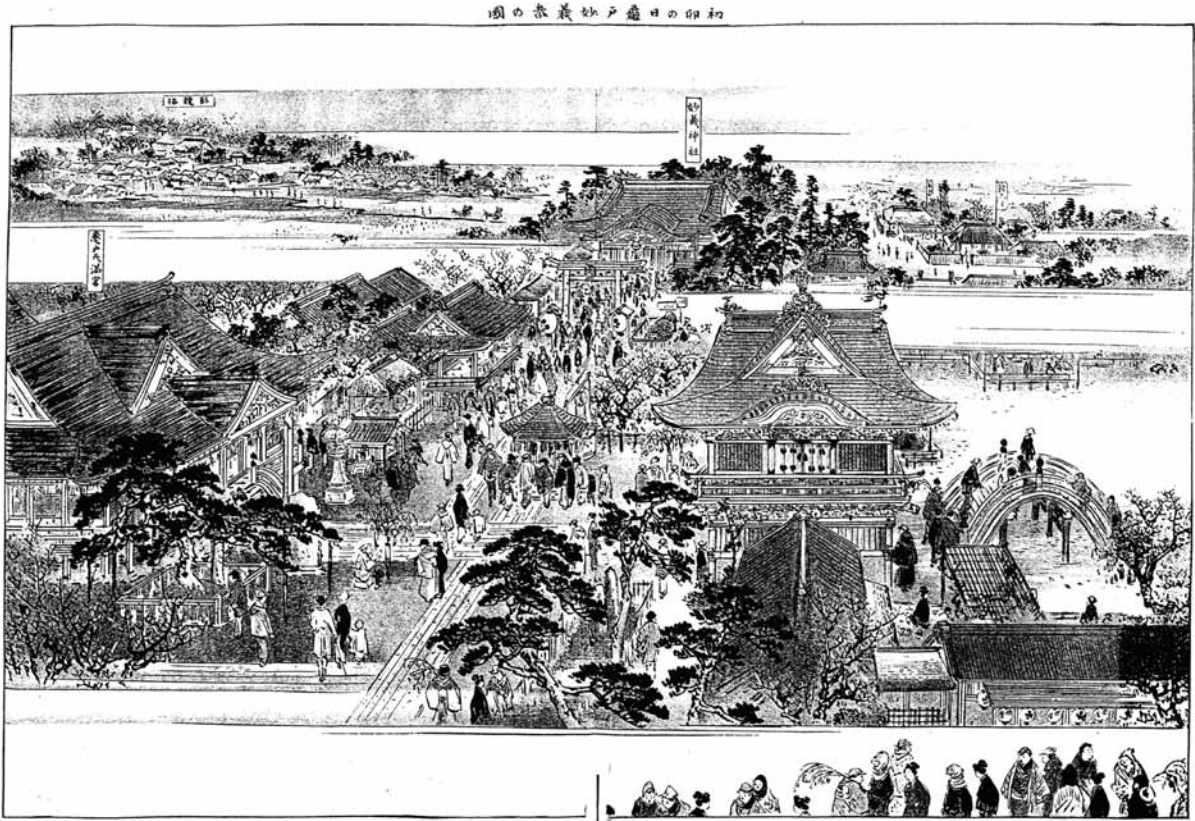


図 4-13 山本松谷「初卯の日亀戸妙義参の図」『風俗画報』157号

洋服との合わせの帽子に関して、明治44（1911）年に出版された『紳士の服装』の「モーニングスーツに就て」の項目に合わせの帽子について「帽子は、中折、山高、夏ならば、パナマ、ムギワラ、何れでも良い。（福原1911：31）」と記されている。さらに「フロックスーツに就て」⁽²¹⁾では「帽子は、シルクハットに限られて居る。併し馬車や自動車の流行しない日本……賃銭が高い日本では、シルクハットのでくてく歩きも、余り感心せぬところから、山高が流行して居る。即ち四季に通シルクハットか、山高が良い。（福原1911：34）」とされている。

以上のことから洋装の用いる帽子の描き方は正しいといえる。松谷が時代に即して挿絵を描いてきたといえる根拠の一つになるだろう。



図 4-14 「洋装（男性）」「初卯の日亀戸妙義参の図」『風俗画報』からトリミング

(3) 事例2：洋装「初卯の日亀戸妙義参の図」「十軒店幟店の図」「日本橋新年の景況」

『新撰東京歳事記』の挿絵の中で描かれている人物は極めて多量である。しかし、人物をつぶさに観察していくと和装の人物が大半であることが分かる。男性の洋装の人物は数人程度しか描かれていない。描かれた事例は以下に記す。

一人目は、「初卯の日亀戸妙義参の図（図4-13）」の左側手前に後ろ姿でコート姿の男性（図4-14）が描かれている。挿絵の構図が遠景であることもあり、人物がとても微細に描かれている。そのた



図 4-15 山本松谷「十軒店幟店の図」『風俗画報』159号



図 4-16 「洋装（男性）」「十軒店幟店の図」『風俗画報』からトリミング



図 4-17 「洋装（男性）」
「日本橋新年の景況」『風俗画報』
からトリミング

め、人物の姿態について鮮明に確認することはできず、羽織っているコートの種類についても不明である。ステッキを持っていることは確認できる。帽子は山高帽、靴は不鮮明のため不明である。

二人目は、「十軒店幟店の図（図 4-15）」の中央にフロックコートを着た男性（図 4-16）が描かれている。ステッキを持ち、山高帽子を着用している。ストライプのズボンである。靴は別の人物と重なり確認することはできない。

三人目は、「日本橋新年の景況（図 4-2）」の左端やや手前に男性（図 4-17）が描かれている。山高

帽子でロイドメガネをかけている。革靴を履いている。コートの種類の特定はできない。ステッキを持ち、襟巻きのようなものを巻いている。

このように、洋装の男性の姿が描かれている事例は少ない。さらに、女性の洋装姿を探してみても、一切描かれていない。男性の洋装姿は減り、女性の洋装姿は姿を消してしまったのだろうか。

明治28(1895)年に出版された『衣服と流行』の「現今流行界の傾向」には婦人の洋服について次の記述がある。

「洋服すたれ殊に婦人の洋服の如きは、大礼服の外は有名なる呉服店にも注文を受くること稀にして、それに引きかへ和服は流行最も隆盛を極むる事実。(大橋 1895:128-130)」

上記の記述によると、女性の和装姿が流行しており、洋装姿は滅多に見られなかったことが分かる。ただ、女性の洋装が完全に姿を消してしまったわけではないことも分かるだろう。

(4) 事例3：履物「十軒店幟店の図」「日本橋新年の景況」

『新撰東京歳事記』には人物が多量に描かれている。絵師の松谷の趣向なのだろう。多量に描かれている分、不明瞭な部分も多く、文献資料などを頼りに描かれている事物の推察を試みる。『新撰東京歳事記』が発刊されたのは明治31(1898)年だが挿絵が描かれた時期はそれよりも前であることを考慮し、明治25(1892)年頃に普及していた履物を調べた。履物は主に下駄・草履・草鞋・靴である。

『明治文化史 生活編』において、履物の下駄について「明治に入ってから男物は堂島が喜ばれ、これに日光下駄、女物は島原形というとじめ形・二重小町・丸ぶち小町、万年形に東下駄が二十五年頃行われ(渋沢 1979:65)」ていたと記している。

「十軒店幟店の図(図4-15)」には堂島と日光下駄を履いた男性が描かれている。図5-1は堂島、図5-2は日光下駄である。左上には吾妻下駄を履く二人の女性(図5-3)が描かれている。右上に腰をかけている女性(図5-4)の履いているものは小町だろうか。不明瞭であり見分けることはできない。

草履については『東京風俗志』に「二十五年の頃より雪駄、男女共に大に行はれ、芸人洒落者などは必ずこれを穿くことなりし(平出 1901:52)」とあり、さらに『衣服と流行』には「靴すたれて駒下駄に人気多く、殊に雪駄の流行隆盛をきはむる事実。(大橋 1895:128-130)」とある。このことから、草履の中でも雪駄(図5-5)と呼ばれるものが流行していたことが分かる。しかし、挿絵から人物の足元(図5-6)の細かい描写は確認することができないため、雪駄であるのか藁草履・竹の皮草履あるいは草鞋なのか、女性の履き物と同様に見分けることはできない。

次に、洋靴を見ていこう。事例2で洋装姿を探ってみたが、洋靴を見分けられたのは「日本橋新年の景況(図4-2)」の左端に描かれた男性(図4-17)のみである。この男性の足元に目を向けてみよう。描かれた靴は小さく、不鮮明なため靴の種類を特定することはできない。黒のゴム靴であると推測することはできる。

『東京風俗志』に収録されている「靴の種類(図5-7)」の図と照らし合わせると深護謨入、ボタン



図5-1 「堂島」「十軒店幟店の図」『風俗画報』からトリミング



図5-2 「日光下駄」「十軒店幟店の図」『風俗画報』からトリミング



図5-3 「吾妻下駄」「十軒店幟店の図」『風俗画報』からトリミング



図5-4 「ぼっくりカ」「十軒店幟店の図」『風俗画報』からトリミング



図5-5 松本洗耳「女物 男物及び子ども物」『東京風俗志』からトリミング



図5-6 「十軒店幟店の図」『風俗画報』からトリミング



図5-7 松本洗耳「靴の種類」『東京風俗志 中』



図5-8 「子供靴（洋靴）」「十軒店幟店の図」『風俗画報』からトリミング



図5-9 「子供靴（洋靴）」「十軒店幟店の図」『風俗画報』からトリミング

がけあたりであると分かる。また、靴の流行について「靴は深護謨入、一般に用ひらる、足にくっつきの良いのと、靴轆の痛まざるのが、その賞用せらるる所以なるべし。(平出 1901:48)」と記されている。以上のことから、「日本橋新年の景況(図 4-2)」に描かれた男性の靴は深護謨入りである可能性が高いといえるだろう。

同様に子ども靴について見ておこう。「十軒店幟店の図(図 4-15)」には靴を履いた子どもの姿(図 5-8・図 5-9)が2名描かれている。右端と左端である。これらも小さく描かれ、不鮮明であるため断定はできないが、『東京風俗志』の「靴の種類(図 5-7)」に描かれている子どもの靴と同じであるといえるだろう。以上のように、足元は極めて不鮮明な点も多いが、他の文献や図像を見ると、松谷が当世を挿絵に反映させようとしていたことが分かるだろう。

(5) 事例 4：髪型「十軒店幟店の図」「児女雛祭の図」「芝増上寺涅槃會之図」

松谷の描く挿絵には、極めて多量な人物が描かれていることが特徴の一つである。本節は主に挿絵に描かれた女性の髪型に着目する。

明治 33 (1900) 年から 35 (1902) 年にかけて刊行された『東京風俗志』には、当時の女性の髪型について以下のように記されている。

「婦女の髻は身分・年齢等に従うて異にすれど、普通には、妙齡に至れば島田、嫁ぎて後は丸髻に結みを習ひとす。(平出 1901:24)」

また、『国民』の明治 27 (1894) 年 6 月 5 日には以下の記事がある。

「婦人夏向髪風及び髪具(整容)——丸髻は日本髪最も美観に富めるものなれども夏向には重くろしく甚だ熱さうなり淡泊(アッサリ)としたる島田髻は昨今の時節に適するも 15、6 歳より 18、9 歳まで妙齡の婦女に限るものなれば需用の範囲広からず(後略)先づ夏向の髪風に適すべきは銀杏返しなり——」。(流行子)」

以上のことから、15～19 歳くらいまでは島田、それ以上の年齢あるいは嫁いだ女性は丸髻、それ以外に銀杏返しと呼ばれる髪型も見られたことが分かる。

「十軒店幟店の図(図 4-15)」の左側に描かれている二人組の女性が、それぞれ島田と丸髻である。左から島田(図 6-1)、丸髻(図 6-2)である。「芝増上寺涅槃會之図(図 6-3)」の左側手前に丸髻の女性(図 6-4)が描かれている。この他にも、『新撰東京歳事記』の挿絵には多量の女性の姿が描かれており、丸髻や島田と思われる髪型を多く確認することができる。いかにこの時代のスタンダードな髪型であったのかうかがうことができる。

一方で、女兒の髪型はどのような姿態だったのだろうか。『東京風俗志』には以下のように記されている。

「幼げなる間は、男女を問はず、お芥子・河童などいふ頭付にすれど、やがて男の児は、散髪に



図 6-3 山本松谷「芝増上寺涅槃會之図」『風俗画報』157号



図 6-1 「島田」「十軒店織店の図」『風俗画報』からトリミング



図 6-2 「丸髷」「十軒店織店の図」『風俗画報』からトリミング



図 6-4 「芝増上寺涅槃會之図」『風俗画報』からトリミング

進み、女は髪を延ばすことをつとめ、禿・お下げなどにし、附髷などをも着く。八九歳に至れば、児髷（又おちご）お煙草盆・鬘下地・蝶々髷などに結い、洋風に倣うてさばき髪のままに「リボン」の剪れにて髷を結び（お下げ）、あるいは南京編（又編下げ）にするもあり。十二三歳に至りなば、早、銀杏返などに結い始め、十四五歳にも至れば、桃割れ・唐人髷・ふくら雀などにも結い、やがて島田に進むなり。（平出 1901：24）」

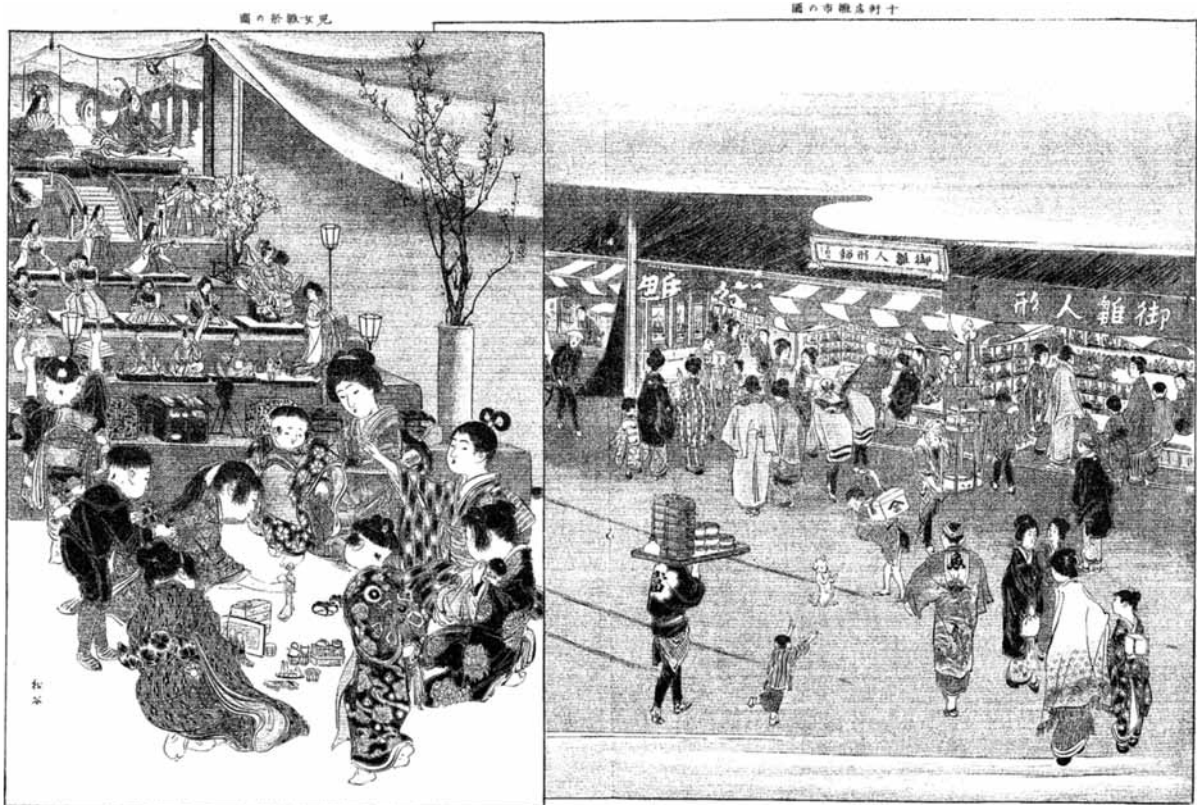


図6-5 山本松谷「見女雛祭の図」『風俗画報』157号

以上のことを踏まえて、女兒の髪型に注目すべく、「見女雛祭の図（図6-5）」を見てみたい。中央の女兒（図6-6）、左側の二人の女兒（図6-7）の髪型はお茶子、中央の女兒はお下げ（図6-8）である。右側には児鬢（図6-9）、そのすぐ下にいる女兒はおそらくお煙草盆（図6-10）だろう。中央の年長の女性は正面を向いているため、髪型を判別することはできなかった。『東京風俗志』の記事と一致している点も多く、風俗を反映できているといえるだろう。

また、束髪ちんまげの女性は『新撰東京歳事記』の挿絵の中からは見つけることはできなかった。遠景の構図で、人物が小さく不明瞭な点も多く、確認できない人物もいた。『衣服と流行』には「束髪萎靡し、日本従来流行、束髪却って芸妓社会へ行はるる事実。（大橋 1895：128-130）」と記されており、束髪は庶民には廃れ、芸妓のする髪型であるとされている。以上のことを踏まえると、挿絵の中に描かれていないことにも納得をすることができる。

さらに面白いことに「芝増上寺涅槃會之図（図6-3）」の左端には、丁鬢姿ちんまげの男性（図6-11）が一人だけ描かれている。これは『新撰東京歳事記』に収録された他の挿絵からは確認することができない。丁鬢姿の男性が、描かれた時代に存在していたのかどうか、簡単にではあるが、新聞記事から探るよう試みたい。

明治18（1885）年、東京絵入新聞8月28日に次のような記事がある。

「東京府下の髪形（整容）—東京府下では丁鬢は探すほどになったが、地方では開化風の散髪は稀なところもある。こういう所では大たぶさ奴風、総髪、赤熊、鳶口、撫下げ、一つ竈口、五分月代、毬栗などさまざま。」



図6-6 「お芥子」「見女雛祭の図」『風俗画報』からトリミング



図6-8 「お下げ」「見女雛祭の図」『風俗画報』からトリミング



図6-10 「お煙草盆」「見女雛祭の図」『風俗画報』からトリミング



図6-7 「お芥子」「見女雛祭の図」『風俗画報』からトリミング



図6-9 「見髻」「見女雛祭の図」『風俗画報』からトリミング

図6-11 「ちょん髻」「芝増上寺涅槃會之図」『風俗画報』からトリミング



また、明治21(1888)年、朝日新聞10月14日に次のような記事がある。

「ただひとりの丁稚姿(整容)一衆議院の市区改正委員会の芳野世経委員は、委員中でただひとり未だに丁髻姿。そのため“内務省の巡視小使などは丁髻の人なりとも容易に軽蔑は出来ぬと言ひ居るよし。”」

このように僅かではあるが、丁髻姿の姿態は残っていたようである。丁髻姿は一人しか描かれてはいないが、挿絵の演出のためだけではなく、当世を反映するために描かれていることが分かるだろう。

(6) 事例5：移動手段・傘「堀切花菖蒲の図」

堀切菖蒲園についての説明は『東京風俗志』の「花菖蒲」の項目に詳細なものがある。

「花菖蒲は堀切村の菖蒲園（小高園）より優れたるはなし、概ね六月中旬を盛りの頃とす。初め文化の頃、この村の百姓伊左衛門なる者、ここに花菖蒲を培養せしに始まり、次第に奇品を増殖し、今日の盛となるに至り、その種類二百五十余种に及ぶといへり。時候もはや暑気に向ひ、道の便も宜からざれど、見る花に乏しき頃とて、ここに遊ぶ客少なからず。（後略）（平出 1902：266）」

以上のことを踏まえて「堀切花菖蒲の図（図 7-1）」に描かれている事物の分析を試みたい。右側には茅葺きの東屋⁽²³⁾（図 7-2）が大きく描かれており、休憩している人々の姿（図 7-3）が見える。左側の遠景にも東屋が何棟か見える。右側から中央にかけて、景色を楽しむ人物が多数描かれている。男女ともに服装は和装である。女性の方が男性に比べて多く描かれている。花菖蒲の見ごろが6月中旬ということもあり、描かれた女性は蝙蝠傘（洋傘）（図 7-4）を手に携えている。

また、『東京風俗志』には松本洗耳^{せんじ}による同一画題の挿絵が収録されている（図 7-5）。こちらも比較対象として見ると、華美な傘を差した女性の姿が多数見受けられる。服装は和装が主で、中央やや左に洋装の男女が描かれている。東屋も左端に描かれている。

では、写真版に堀切菖蒲園はどのように描かれているのだろうか。図 7-6 は花菖蒲が広がる中、和装の女性が数名写り、蝙蝠傘を差す姿が見える。また、左側には東屋が写し出されている。これは「堀切花菖蒲の図（図 7-1）」に描かれていることと同様である。

しかし、一方では写真版には写されているが、挿絵に描かれていない事柄も存在することも分かる。図 7-7 を見ると、人力車が写っていることが分かるだろう。図 7-8 にも人力車が写されている。これは「堀切花菖蒲の図（図 7-1）」には描かれていない事物である。『東京風俗志』の説明にあった「道の便も宜からざれど、（中略）ここに遊ぶ客少なからず。（平出 1902：266）」という一文の裏付けになる、「堀切花菖蒲の図（図 7-1）」には描かれていない移動手段が写真版には写されている。

さらに『明治文化史 生活編』に掲載された、普及する人力車数について表を引用して記す（表 2）。これにより明治 31（1898）年に最も増加していることが分かる。それにもかかわらず、「堀切花菖蒲の図（図 7-1）」には描かれていない。

また、図 7-7、図 7-8 の人力車に乗った女性に着目すると、和傘を差している。図 7-7 は奴傘、⁽²⁴⁾図 7-8 は蛇の目傘⁽²⁵⁾を差しているが、「堀切花菖蒲の図（図 7-1）」に描かれている傘は全て蝙蝠傘である。しかし、『東京風俗志』には「蛇の目に次いで奴傘あり、品劣れり。（中略）元来都下の傘は青山百人町、及び南葛飾郡の小岩村の産名ありて、両扱とも七十八軒の傘やありしが、今衰へてその数減ぜり。（平出 1901：54）」とある。このことから、数は減ってはいるものの、洋傘へと完全にとって代わられたというわけではない。

また、『明治文化史 生活編』の女性用の蝙蝠傘について、「三十年になると深張の令嬢用の美人傘が琥珀・緞子・紬等で作られ、傘のへりには房が下がり、握り手は従来の L 字形とちがった蕨手をしたものが行われ、模様も一般に華美なものが多く、以来いろいろの流行がはげしくなった。（渋沢 1979：85）」と記されているが、華美な蕨手の傘（図 7-9）は挿

表 2 普及する人力車数

和暦	人力車数
明治 8 年	113,921
明治 11 年	142,656
明治 16 年	170,079
明治 21 年	171,589
明治 26 年	199,411
明治 31 年	204,419
明治 36 年	185,087
明治 41 年	165,230
大正 元年	134,232

（渋沢敬三編（1974）『明治文化史 生活』）

堀切花菖蒲園の圖



図7-1 山本松谷「堀切花菖蒲の図」『風俗画報』159号



図7-2 「茅葺きの東屋」
「堀切花菖蒲の図」
『風俗画報』からトリミング



図7-3 「休憩する人々」
「堀切花菖蒲の図」『風俗画報』
からトリミング



図7-4 「蝙蝠傘（洋傘）」
「堀切花菖蒲の図」
『風俗画報』から
トリミング



図7-5 松本洗耳「堀切菖蒲園」『東京
風俗志 下』



図 7-6 撮影者不明「堀切ノ菖蒲」『日本之勝景 一名・帝国美観』1902年



図 7-7 小川一真「菖蒲見物」年代未詳長崎大学図書館所蔵



図 7-8 撮影者不明「堀切之菖蒲」『日本之勝観』1902年



図 7-9 松本洗耳「蝙蝠傘」『東京風俗志 中』

絵から見つけることはできない。

これは『新撰東京歳事記』が明治31(1898)年に発刊されたことから、収録された挿絵はそれ以前に描かれたもので、その時点では華美な蝙蝠傘は流行していなかったのだろう。明治35(1902)年に刊行された『東京風俗志』の堀切菖蒲園の挿絵(図7-5)には華美な蕨手の傘が描かれていることから描かれた時代が異なっていることが分かるだろう。

(7) 事例6: 芸人「日本橋新年の景況」

『東京風俗志』には、新年の辻芸人について次のように記している。

「日々門口に立つ物貰を始め、さまざまの身振などし、卑しげなる技を売る辻芸人の数々も尽しがたし。歳之首に来たる鳥追、猿舞し、角兵衛獅子など田舎人の眼にも新しからず。(平出

以上のことから、新年には様々な芸人が路上で歩いていたのだと想像をすることができる。実際には、新年の風景を描いた「日本橋新年の景況（図4-2）」には、その姿が描かれている。右側手前には獅子舞（図8-1）、その手前に猿回し（図8-2）、左側中央やや手前に角兵衛獅子（図8-3）、その手前に赤子を背負った鳥追（図8-4）の姿が見える。その左隣には萬歳の姿（図8-5）が見える。

『新撰東京歳事記』には、これらの門付き芸人の姿態について詳しく記載はされていないが、『風俗画報』224号（明治34（1901）年）特集号『民間行事新年の祝』に詳しく記載されている。

まずは、鳥追についてみていこう。記事は以下の通りである。

「三味線弾きつれて、曲節面白く唄ひ来るは、鳥追といへる賤の女にぞある。（中略）今は乞丐^{かたい}の婦女、編笠を頂き、門口へ来り唄ふなり。（中略）維新後に及びて、萬歳、鳥追、春駒の類は、一時禁遏せられて、各々姿を隠したるが、萬歳は今の日本舞とあらたまりて、春駒は絶えたり。（後略）（風俗画報224号1901：33-34）」



図8-1 「獅子舞」「日本橋新年の景況」『風俗画報』からトリミング



図8-2 「猿回し」「日本橋新年の景況」『風俗画報』からトリミング



図8-3 「角兵衛獅子」「日本橋新年の景況」『風俗画報』からトリミング



図8-4 「鳥追」「日本橋新年の景況」『風俗画報』からトリミング



図8-5 「萬歳」「日本橋新年の景況」『風俗画報』からトリミング



図8-6 山本松谷「現今新年途上往來の図」『民間行事新年の祝』224号



図8-7 「鳥追」 「現今新年途上往來の図」『民間行事新年の祝』からトリミング



図8-8 松本洗耳「市中新年の有様」『東京風俗志 中』からトリミング

鳥追は三味線で編み笠を被る乞食の婦女であると記されている。「日本橋新年の景況（図4-2）」に描かれている鳥追（図8-4）は編み笠ではなく手拭い被りをしている。乞食であるかは判別できない。また、『民間行事新年の祝』に収録されている、松谷画の「現今新年途上往來の図（図8-6）」にも鳥追が描かれている。こちらの鳥追（図8-7）も編み笠ではなく、手拭い被りである。

一方で『東京風俗志』と『東京年中行事』に描かれている鳥追（図8-8・図8-9）は編み笠姿である。写真版で残されている鳥追（図8-10・図8-11）も編み笠姿である。

次に獅子舞について見ていきたい。こちらも先の例に倣い、『民間行事新年の祝』の説明を参考にする。



図8-9 作者不明「鳥追」『東京年中行事 上』



図8-10 撮影者未詳「味線を弾く鳥追い女」
年代未詳 長崎大学図書館所蔵



図8-11 白井秀三郎「鳥追女たち」年代未詳
長崎大学図書館所蔵



図8-12 「獅子舞」『現今新年途上往來の図』
『民間行事新年の祝』からトリミング



図 8-13 撮影者不明「獅子舞」『よみがえる明治の東京：東京十五区写真集』



図 8-14 松本洗耳「市中新年の有様」『東京風俗志 中』



図 8-15 「萬歳」「市中新年の有様」『東京風俗志 中』からトリミング



図 8-16 撮影者不明「万歳」『よみがえる明治の東京：東京十五区写真集』

「獅子舞とは、大なる獅子頭を被りて舞ふなり。太神楽に行ひて悪魔を祓ふといへり。(中略)獅子舞は正月のみに限れざるも、新年の風物として、いと興ある舞なれば、諸説かかげて、其の沿革に及ぶべし。(後略)(風俗画報 224号 1901:34)」

「日本橋新年の景況(図 4-2)」に描かれている獅子舞は、大きな獅子頭を被らずに移動している姿(図 8-1)だろうか。「現今新年途上往来の図(図 8-6)」には獅子頭を被った獅子舞(図 8-12)が描かれている。写真版を(図 8-13)見ても、姿態は説明と一致しており、松谷が描く獅子舞とも一致している。

次に萬歳について見ていきたい。こちらは『東京年中行事』の説明を参考にする。

「松の内の六日の間を、いろんな祝ごとを唱えながら烏帽子に素袍姿で鼓を打ちつつ、お伴に大黒頭巾を冠り袋を背負った才蔵をつれて、家々を巡り歩いて物乞うて行くのを、東京では三河万歳という。(若月 1911a : 45)」

以上の内容を踏まえ、「日本橋新年の景況(図4-2)」の萬歳の姿(図8-5)に目を向けると、右側の人物は烏帽子、素襖姿である。左側の人物は大黒頭巾で袋を背負い、太鼓を持っている。記事の内容と一致していることが分かるだろう。『東京風俗志』の「市中新年の有様(図8-14)」の挿絵にも、同様に萬歳の姿(図8-15)が描かれている。

写真版の萬歳(図8-16)を確認すると描かれている萬歳の姿態と異なる。両方とも烏帽子を被り、どちらも素襖姿、それぞれ扇子と太鼓を持っている。必ずしも『東京年中行事』に記されている萬歳の姿態ということではなく、多少の変化はあるようだ。

(8) 事例7：寺社の風景「七月十日浅草観音四万六千日参詣の図」

次は、「七月十日浅草観音四万六千日参詣の図(図9-1)」に目を向けてみよう。本節は、観音堂(本堂)⁽²⁶⁾の外観とその周囲にある境内の事物を写真と比較する。

まずは観音堂の造りを写真版と比べてみよう。写真版(図9-2・図9-3・図9-4)を見ると描かれた挿絵と写真版に写し出された観音堂の造りは一致しているといえるだろう。形や柱の位置も正しく、詳細に描かれていることが分かる。さらに、中央にある大提灯の文字に着目すると、挿絵には「志ん橋」の文字が見える。これは、歌川広重の作品である「江戸名所百景」のうちの一つ「浅草寺金龍山(図9-5)」に描かれている大提灯と同様のものである。新橋の信徒が奉納したことから「志ん橋」と記されていることは広く一般に知られている。この大提灯も写真版(図9-2・図9-3)にも写し出され、挿絵に描かれている大提灯と一致する。

次に、挿絵の中央より左右に二基の大きな常灯明(図9-6)が描かれている。写真版(図9-4)を見ると、これらの常灯明も写し出されている。形は一致しているようだが、「去暗」「就明」の刻まれた文字は挿絵には描かれていない。この常灯明については文献から引用した説明を次に記す。

「本堂の前に数基の常燈明あるを觀るべし神谷伝兵衛酒井八右衛門奉納にかかるものは殊に衆目を惹き就中酒井八右衛門の二基は去暗就明の文字を刻し一際高く大なるを以て皆足を其前に停む明治廿五年十二月建つる所なり(金竜山縁起編修会編 1912 : 122)」

以上のことから分かるように、明治25(1892)年12月に酒井八右衛門作によって建立されたようだ。そして、「去暗就明」の文字を刻まれていたことが分かる。挿絵が収録された『新撰東京歳事記』が出版されたのは明治31(1898)年であるにもかかわらず、「去暗就明」の文字は挿絵に描かれていないことが分かる。

松谷の意識の中に、常灯明に刻まれた文字は浅草観音堂を表すランドマークと認識していなかった



図9-1 山本松谷「七月十日浅草観世音四万六千日参詣の図」『風俗画報』159号



図9-2 「浅草観音堂寺社」『東京風景』1911年



図9-3 「浅草観音本堂寺社」『最新東京名所写真帖』1909年



図9-4 「浅草観世音本堂」『東京名所写真帖』1910年



図9-5 歌川広重「浅草寺金龍山」『名所江戸百景』1856年



図9-6 「常灯明」「七月十日浅草観世音四万六千日参詣の図」『風俗画報』からトリミング

可能性が高いだろう。浅草観音堂や大提灯等を描くことで、画題として成立しているため、常灯明までは子細に描かなかったと推測することができる。

(9) 事例8：潮干狩り「現今品川汐干の図」

『新撰東京歳事記』には、月々の行事以外にも四季の行楽について、月々の行事を記した後、月末にまとめて記してある。そして、四季の行楽を画題とした挿絵も収録されている（表1）。そのうちの 하나가品川の潮干狩りを描いた挿絵、「現今品川汐干の図（図10-1）」である。挿絵に目を向ける前に、まずは記事の内容を確認したい。内容は以下の通りである。

「此月上旬より中旬頃まで大汐の日を尤も佳とす其地は品川臺場邊より芝浦、濱離宮下、深川越中島海隈より洲崎沖、砂村邊まで一帯の地干潟となりて笑声放歌に満され塞がらず暑からず一歳中の好季節特に此頃は海面風静かなるものなれば「帆楹に帆のもたれけり春の海」といへる景況にて麗かなるを例とす其最寄りの賑ひ一方ならず、蛤蜊、文蛤、蜆、サルボウ、カキ若くは比目魚を拾ひ料理し又之を携へ歸る其の游人を遠望すれば沙上に黒豆を散布せるか如く又螻蟻の群るか如し春とし言へば何ろ（カ）花のみ獨り春ならんや是等も亦春遊の一興なり。（汲古齋主人編1898a：20-21）」

上記の記事の内容は品川の潮干狩りの詳細な説明とはいえないだろう。月順に配列された月々の行事ではなく、四季の行楽として記されており、俳諧の季語や季題といった印象が強い。『新撰東京歳事記』の特色の一つといえるだろう。

挿絵に描かれている事物を探るべく、『東京風俗志』の説明を引用する。内容は以下の通りである。

「この頃、また潮干狩の遊びあり。多くは中流以下の遊びにして、陰曆三月三日前後を以て最好の期とす。洲崎・芝浦・台場沖の辺は海塩遠く退けば、一面の砂地となりて徒歩すべし。これに遊ぶものは、満潮に乗じて船を寄せ、干潮を待ちて下り、砂中を探りて、貝を拾ふもあれば、蟹



圖中干沙川品今現

図10-1 山本松谷「現今品川沙干の図」『風俗画報』157号



図10-2 「砂中を探る男性」
「現今品川沙干の図」
『風俗画報』からトリミング



図10-3 「手ぬぐい被りの女性」
「現今品川沙干の図」
『風俗画報』からトリミング



図10-4 「着物のしりを絡げた素足の女性」
「現今品川沙干の図」
『風俗画報』からトリミング



図10-5 「舟」
「現今品川沙干の図」
『風俗画報』からトリミング



図10-6 「舟」
「現今品川沙干の図」
『風俗画報』からトリミング



図 10-7 富田柳亭「洲崎汐干狩の図」『風俗画報』138号



図 10-8 「手ぬぐい被りで着物のしりを絡げた素足の女性」
「洲崎汐干狩の図」『風俗画報』からトリミング



図 10-9 「砂中を探る女性」
「洲崎汐干狩の図」『風俗画報』からトリミング



図 10-10 「幟や吹流し」
「洲崎汐干狩の図」『風俗画報』からトリミング



図10-11 富田柳亭「品川沖汐干狩の図」『風俗画報』208号



図10-12 「幟」 「品川沖汐干狩の図」 『風俗画報』 からトリミング



図10-13 撮影者不明「潮干狩り」 『よみがえる明治の東京：東京十五区写真集』

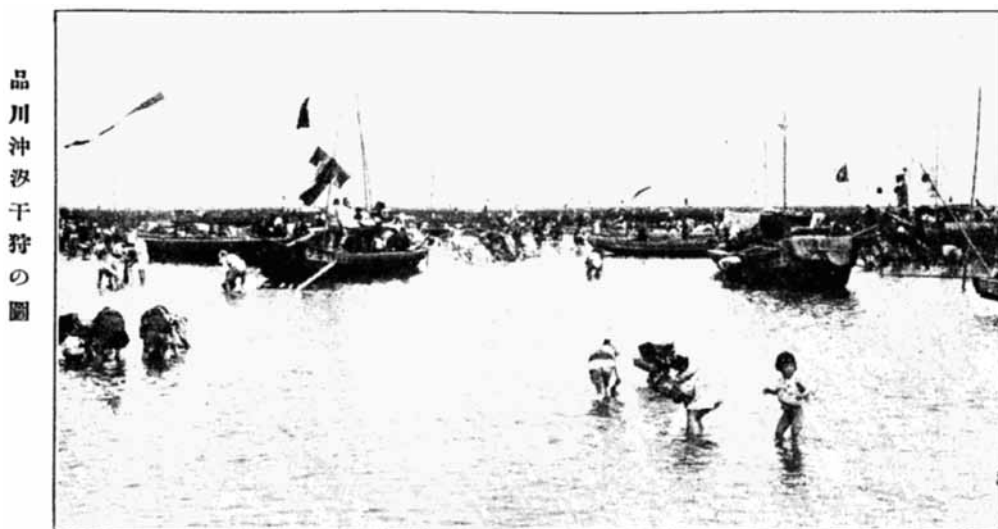


図10-14 坪川辰雄「品川沖汐干狩の図」『風俗画報』232号

を追ふもあり。貝は蜆・文蛤・馬鹿・蛤蜊等なり。若き女の手拭かぶり、紅の手襷かけて、裳を褰げて、素洗足に馳せありくさまは、何となう春めかしく、田舎の田植にあらずんば宇治の茶摘みにも似たらん。いづれも船に乗り出でて集ひ來ることなれば、我が船見失はじと、舳艫^{じくろ}に幟、吹流し、さては子供の着物を竿に吊るすもあれば、箆籬を高く掲げたるもありて、目印の思つきさまざまなり。かくて満潮の時を考へて、各々船に帰るなり。帰りて後には獲物を料理して、酔ひつ歌ひつ、日の西に入る頃に至りて散ず。(平出 1902: 261-262)」

以上のことを踏まえて、「現今品川汐干の図 (図 10-1)」に描かれた事物を確認する。中央やや右側に砂中を探る男性が二名 (図 10-2)、貝を拾っているのだろう。左側には手拭いを被った女性 (図 10-3)、その左側には着物のしりを絡げた素足の女性 (図 10-4) も描かれている。さらに、船 (図 10-5・図 10-6) が何隻か寄せられており、『東京風俗志』の内容通り、それぞれ目印として幟^{のぼり}を立てている。しかし、吹き流しや子どもの着物などは船の目印として描かれていない。

また、『風俗画報』の他号には松谷以外の画家が描いた「潮干狩」を画題とした挿絵が数点描かれている。描かれている事物の比較を試みたい。

まず、138号 (明治30 (1897) 年) の富田柳亭が描く「洲崎汐干狩の図 (図 10-7)」を見てみよう。松谷の描く図よりも、さらに近景で描き、手前の描写は松谷の画業よりも克明である。右の女性 (図 10-8) を見ると、手拭いを被り、着物のしりを絡げ、素足である。その左隣には砂中を探る女性の姿 (図 10-9) が描かれている。これは、松谷の描く情景とも一致している。また、右端奥には船 (図 10-10) が留めてあり、幟や吹き流しが描かれている。中央の砂中を探る女性 (図 10-9) は、熊手を使っている。このように、松谷の挿絵には描かれなかった吹き流しや熊手も描かれている。

次は、208号 (明治33 (1900) 年) の富田柳亭「品川沖汐干狩の図 (図 10-11)」である。こちらも服装や熊手なども同様に描かれている。左側奥に描かれている船の目印となる幟 (図 10-12) を見ると様々な趣向を凝らしていることが分かる。これは『東京風俗志』の説明の通りである。

では、写真版にはどのように写っていたのだろうか。手拭いを被り、和服のしりを絡げている姿や熊手を使って砂中を探る姿などが写されている (図 10-13)。撮影地は不明であるが、一般的な潮干狩りをする姿を確認できるだろう。また、『風俗画報』第232号 (明治34 (1901) 年) には坪川辰雄撮影の「品川沖汐干狩の図 (図 10-14)」が収録されている。不鮮明ではあるが、先の写真版には写し出されていなかった、幟が写し出されている。吹き流しや衣服のようなものを掲げているものが確認できる。描かれている事柄は、絵によって多少異なるが、文献や写真版と一致する事物が描かれていることが分かる。

IV 歴史民俗資料として見る『風俗画報』の再検討

(1) 描かれた事物と描かれなかった事物の歴史的考証

松谷が描く挿絵は、画面いっぱい描かれた群衆や様々な事物が特徴であることは先の事例からも分かることだろう。そこに描かれた群衆や事物は、その挿絵の画題を表すモチーフやランドマークとは別の事物であり、それらは無数に描かれている。

例えば、既に事例1や事例2で取り上げた「日本橋新年の景況」や「十軒店職店の図」には、新年や端午を表すモチーフやランドマークのみに留まらず、当時の生活文化を表した人々の衣服や髪型なども多分に描かれていた。

このように、画題を表すモチーフやランドマーク以外であっても、当時の生活文化や歴史を表していることは先の事例1～8からも分かる。そして、松谷は当時の社会や流行、生活文化などを反映させながら様々な事物を描いていたことが明らかになった。

もちろん、画家である松谷の演出によって描く人物や事物の配置を変更し、見栄えや構図を考慮して、描く事物の取舍選択が行われていることは確かである。それは、2章で松谷自身が語っていることから明らかである。だが、画面内に表現された事物の子細な分析を進めると、挿絵の描かれた明治30(1897)年頃には存在しない事物を描く等の、誇張した表現は含まれていないことが分かる。

ただ、絵師である松谷が画面構成のために事物の取舍選択を行ったことで、描ききれなかった、あるいは描かなかった事物が多数存在していることも見逃すことはできない。

事例2では洋装の男性が極端に少なく、女性の洋装は皆無であった。同様に、事例4では女性の洋装を見つけ出すことはできなかった。だが、洋装、洋髪の人物が挿絵に描かれていないからといって、描かれた時代に全く存在しなかったというわけではなく、当時の町中にあふれる洋装・洋髪の人物の度合いや割合を反映した結果であることが明らかとなった。

事例5では、移動手段としての人力車や季節を表す和傘などが写真に残されているにもかかわらず、松谷の描く挿絵には描かれていない。あるいは、別の事物が描かれていた。これは菖蒲園という場所を描く際に、人力車を画面上に描いてしまうと美観を損ねてしまうからだと推測することができる。このように、演出のために描かれなかった事物が存在することは明らかである。

事例7では、浅草観世音境内の常灯明に刻まれている文字など、挿絵には描かれていなかったが、当時は存在していたのであろう事物にも触れた。取材の有無によって子細に描かれなかった可能性も考えられる。もう一方で、これは浅草観世音四万六千日参りを表すランドマークとして浅草寺を大きく描き、モチーフとして酸漿市や群衆を描いたため、既に画題は成立していることから描かれなかったのかもしれない。松谷にとって、この常灯明は画題を表すランドマークではなかったのである。

以上の事例分析から分かるように、挿絵という資料の特性上、その画面内に当時の風俗を凝縮して全て盛り込むということは不可能である。そのため、当然描かれることと描かれないことが現れてしまう。だからといって描かれていないため、当時の生活文化として存在しないということではない。

描かれた事物は時代を反映したものであると同時に、挿絵という資料の特性として描かれなかった事物も多数存在することを理解する必要があるだろう。

(2) 『風俗画報』の横断的利用

本論文を執筆するにあたり、『風俗画報』の特集号である『新撰東京歳事記』上下巻(157号、159号)を対象を絞ったが、明治22(1889)年2月から大正5(1916)年3月までに刊行された518冊のうち、極僅かではない。

事例6、8からも分かる通り、『風俗画報』の他号には同一の画題である挿絵を収録している場合がある。全く同一の挿絵というわけではなく、描く画家が異なっている場合や、構図やモチーフが異な

った挿絵が収録されている場合などである。記事の項目に関しても同様で、取材した人物が異なっている場合や補足として追記されている場合もある。

これは事例8からも分かるだろう。潮干狩りを画題とした挿絵だけを探しても、27号（明治24（1891）年）富岡永洗「品川汐干之図」、138号（明治30（1897）年）富田柳亭「洲崎汐干狩の図」、208号（明治33（1900）年）富田柳亭「品川沖汐干狩の図」を見つけることができる。写真版も第232号（明治34（1901）年）に坪川辰雄撮影の「品川沖汐干狩の図」が収録されている。このように、挿絵や写真版などの図像だけでも数多く参照すべき資料が他号に跨がって存在している。

また、挿絵に描かれた事物の説明に関しても、他号に詳細が記されている場合がある。それは事例6でも明らかのように、新年の門付き芸人については224号（明治34（1901）年）の『民間行事新年の祝』に詳細な記事が掲載されている。

このケースは、『新撰東京歳事記』の発刊後の特集号であるため、補足としての意味合いも含まれているのだろう。逆の場合では、同書が発行される前の号に詳細が記されている場合もある。挿絵に描かれた事物に対して、詳細な記事が記されていないからといって、同書が資料としての価値が低いとするのは早計である。

『新撰東京歳事記』には挿絵の詳細な説明があまり記されていないが、その理由は、特集号であるため他号とはやや記事の形式や趣旨が異なっていたことが挙げられる。東京の年中行事・歳時記を網羅するために、月順に配列し、簡潔な説明に留まっている。そのため、収録された挿絵に描かれた事物を分析する際に、同書の記事を参照しても、詳細な説明がないものが多数存在していたのだろう。

今回、限定的に使用した『新撰東京歳事記』では、挿絵としてピックアップされなかった年中行事の挿絵が他号に多数収録されている。松谷以外の絵師も描いている。いくつか抜き出しを行ったものを記す（表3）。表3で記したものは、年中行事を表す挿絵のほんの一部に過ぎない。以上のことから分かるように、『新撰東京歳事記』に取り上げられなかった年中行事はそれ以降の号に収録される場合がありうる。また、同書よりも前の号に掲載された年中行事が画題となる挿絵は、既に収録済みという理由で同書には掲載されなかった可能性がある。

『風俗画報』の中から、特集号である『新撰東京歳事記』に限定し、対象を絞ることで、通巻518冊を数えた資料としての特性や可能性を狭めてしまっていた自身への批判も含んでいる。他号へ跨がった横断的な活用は今後の課題である。

表3 『新撰東京歳事記』以外に収録された年中行事を示す挿絵

絵師	タイトル	収録号数・特集号	年中行事名
山本松谷	「亀戸天満宮鶯換の図」	132号（明治30年）	鶯換
山本松谷	「現今各商店の図あらもの屋図」	85号（明治28年）	初午
山本松谷	「茅場町薬師堂の図」	新撰東京名所図会・日本橋区四（明治34年）	灌仏会
山本松谷	「軍人の遺族魂祭の図」	95号（明治28年）	盂蘭盆
尾形月耕	「夷講の図」	125号（明治29年）	夷講
如洗・洗心合作	「浅草鷲神社参詣の図」	176号（明治31年）	西の市
山本松谷	「民家天長節を祝するの図」	127号（明治29年）	天長節
黒崎修斎	「青山練兵場入営者集合の図」	201号（明治32年）	新兵入営
山本松谷	「深川八幡宮年の市図」	新撰東京名所図会・深川公園（明治30年）	年の市

おわりに

渋沢の『絵巻物による日本常民生活絵引』から始まり、神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の流れを継承する形で、近代の図像である『風俗画報』の資料化を試みた。それは、画題を表すモチーフやランドマーク以外の事物に着目し、それらを抽出し、文献や図像等から比較することで歴史的考証を進めた。

今回、分析対象として限定した特集号『新撰東京歳事記』の挿絵は、全て山本松谷によって描かれていた。松谷の画業による挿絵は、画面内に無数の人物や事物が描かれていることが特徴の一つでもあった。その人物や事物の表現は極めて魅力的であり、当時の生活文化や歴史を探る上で描かれた様々な姿態は資料として、大きな可能性を秘めている。

本論文では、服装や移動手段、寺社の風景、芸人、四季の行楽等の事物を抽出して、分析したことを事例として挙げた。分析事例の中からも分かるように、松谷の描く挿絵と文献や他の図像を比較すると、微細に描かれた事物でさえも当時の時世を表している。以上のことから、松谷が描いた約 1300 枚の挿絵や口絵においても、資料として有用である可能性が高いといえる。

もちろん、無数に描くことによって、描かれている事物が不鮮明になり、判然としない事物も多い。遠景と近景の構図を巧みに使い分ける松谷の画業だが、遠景はもちろんのこと、近景の構図でさえ、人物や事物を微細に描いている。そのため、石版印刷の刷りによって、つぶれてしまって不明瞭な部分もあるだろう。しかし、そのことを補う以上に当時の風俗を無数に描き出している点からも、資料として価値が高いことは明らかである。

ただ、今回歴史的考証を行い、分析・読解を試みた資料は『風俗画報』の 518 冊のうちの特集号 2 冊でしかない。そのため、『新撰東京歳事記』以外で松谷が描いた約 1300 枚の挿絵も資料として有用である“可能性”が高いことを示すに留まる。この膨大な資料群を段階的に分析・読解、資料化の試行を重ねることは、必要な作業である。もちろん、今回本論文で扱った挿絵には明らかにできなかった事物も多く残されている。職人の姿、祭りの風景、街の景観、職業ごとの制服、和服の柄など様々である。これらも再度、分析・読解をいずれ行うべきである。そして、それらを行うことが、絵引資料のような研究資源として利用できるものとできないものを選別することにもつながるはずである。

また、今回は絵画部門の絵師である松谷に焦点をあてたが、『風俗画報』の挿絵を描いた絵師は他にも多数存在する。尾形月耕、寺崎広業、富岡永洗、富田柳亭、宮川洗圭など様々である。絵師によって描き方や画面構成などはもちろん異なり、彼らが描いた事物が当時の生活文化や歴史を挿絵に正しく反映させているかどうかは明らかではない。絵師ごとに、筆致や描く事物の傾向や特徴などを分析し、歴史民俗資料としての価値を見極める必要がある。

以上のように膨大な挿絵数を誇る『風俗画報』であるため、分析・読解課題は山積みであるが、『風俗画報』の資料としての可能性を示すことができた。これにより『風俗画報』に興味関心が僅かでも集まり、多くの人々によって分析・読解や資料化が試行され、積み重ね、資料としての活用が盛んに行われるようになることを願うばかりである。

注

- (1) 教科書には限られた図像の収録とキャプション程度に留まっているという問題点もある。また、教科書以外にも図説の教材も多数出版されている。
- (2) 筆者は学士論文にて博物館の教育普及をテーマに扱ったことから、社会教育や学校教育を踏まえた研究動機となっている。
- (3) 絵画の塗膜を支える面を構成する物質。紙、キャンバス、壁面などを指す。
- (4) 渋沢敬三編『絵巻物による日本常民生活絵引』角川書店 1964-1968 年（渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引』平凡社 1984 年）
- (5) 拙著「柳田民俗学における図像の資料的価値の検証——『風俗画報』と『年中行事図説』の比較から——」『民具マンスリー』第 49 巻 7 号 2016 年 P 11～23
- (6) 宮本常一『絵巻物に見る日本庶民生活誌』中央公論新社 1981 年
- (7) 日本の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、重点的な支援を行うことを通じて、国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的としたプログラム。日本学術振興会に設置された 21 世紀 COE プログラム委員会での審査によって、補助金交付先の審査・評価がなされる。
- (8) 図像の他、身体技法、環境・景観を柱とした。
- (9) 本文編と語彙編の二冊で編成。本文編は英文版『絵巻物による日本常民生活絵引』としての性格を有し、語彙編は英語、日本語、中国語、韓国語をキャプション番号に対応させて比較対照できるようになっている。
- (10) 当初は近世生活絵引と近代生活絵引を並行して編纂を進める予定だったが、実際の編纂計画を策定する中で困難が予想されたため、21 世紀 COE プログラムでは日本近世生活絵引の編纂に集中し、日本近代生活絵引の編纂は他日に期すことになった。
- (11) 槌田満文「『風俗画報』の余命」『文藝論叢』第 12 号 1976 年 P 18～23
- (12) 先川直子「『風俗画報』における明治後期の衣服の改良の動き——女子服改良を中心に——」『目白大学短期大学研究紀要』42 号 2005 年 P 15～28
- (13) 山本松谷、木村莊八、安藤鶴夫、槌田満文「明治の週刊紙“風俗画報”をめぐって（座談会）」『美術手帖』113 号 1956 年 P 109～118
- (14) 本論で用いる「モチーフ」は、画家や写真家が画題を描写・表現のために選んだもの（人、物、光景）を意味する。
- (15) 本論で用いる「ランドマーク」は、画家や写真家が画題を描写・表現のために選んだ場所を表す目印を意味する。
- (16) フェルト製で上部が丸くて高い、つばのある男子の礼服用帽子。
- (17) 柔らかな布地で作られ、いただきの中央が縦におれくぼんだ、つばのある帽子。
- (18) 前びさしのついた丸く平たい帽子。
- (19) 縮緬などの四角い布にひもをつけ、目だけを出して頭・顔を包む婦人の防寒用頭巾。
- (20) 洋装については事例 2 を参照。
- (21) おそらく「フロックコートに就て」の誤りと思われる。
- (22) 履き物の一種。草履の裏に革を張ったもの。
- (23) 庭園や公園内に、休憩、眺望のため、あるいは園内の一点景として設けられる小さな建物。屋根は四方を葺きおろした方形造り、寄棟造りになっている。
- (24) 雨傘の一種。蛇目傘の周囲の縁二寸ほどを薄黒く塗って、中央は黒くしないもの。^{じやのめがさ}
- (25) 傘の表面を張った紙に、石突を中心として、蛇の目のように中を白く、周辺を黒・紺・赤などで太く輪状に塗った雨傘。
- (26) この観音堂は昭和 20（1945）年 3 月 10 日の大空襲で焼失し、現在の観音堂は昭和 33（1958）年 10 月 17 日に再建されたものである。従って、挿絵や写真版に写し出されている観音堂は現在のものとは異なる。

引用・参考文献

- 大藤時彦 (1956)「明治の風俗研究」『近代日本文化』6号 洋々社
- 大橋又太郎編 (1895)『衣服と流行』博文館
- 勝本清一郎 (1962)「荷風と東京風景」『図書』160号 P16～19 岩波書店
- 門田信一、今坂幸一、山崎廣志、安達寛 (2011)「風俗画報の絵に見る明治三陸大海嘯——津波のこわさを知る——」『土木史研究講演集』Vol.31 P229～232
- 門田信一、竹谷栄一、山崎廣志、安達寛 (2012)「風俗画報などの絵に見る濃尾地震」『土木史研究講演集』Vol.32 P17～20
- 後藤雅子 (2007)『高知県立美術館研究紀要』7号 高知県立美術館
- 金竜山縁起編修会編 (1912)『南無観世音：金竜山縁起正伝』芳林堂
- 斎藤月岑 (1838a)『東都歳事記』卷之一春之部・卷之二夏之部 (市古夏生・鈴木健一校訂『新訂東都歳事記上』2001年 筑摩書房)
- 斎藤月岑 (1838b)『東都歳事記』卷之三秋之部・卷之四冬之部 (市古夏生・鈴木健一校訂『新訂東都歳事記下』2001年 筑摩書房)
- 先川直子 (2005)『『風俗画報』における明治後期の衣服改良の動き——女子服改良を中心に——』『目白大学短期大学研究紀要』42号 目白大学短期大学 P15～18
- 渋沢敬三編 (1964-68)『絵巻物による日本常民生活絵引』角川書店 (渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引第一巻』平凡社 1984年)
- 渋沢敬三 (1954)「絵引は作れぬものか」(渋沢敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引第一巻』平凡社 1984年に収録)
- 渋沢敬三編 (1974)『明治文化史 生活編』原書房
- 関井光男 (1996)「東陽堂快人伝」『東京人』No.106 都市出版株式会社
- 玉井哲雄編 (1992)『よみがえる明治の東京：東京十五区写真集』角川書店
- 槌田満文 (1976a)『明治東京歳時記』青蛙房
- 槌田満文 (1976b)「『風俗画報』の余命」『文藝論叢』第12号 P18～23 立正女子大学短期大学部文芸科
- 槌田満文 (1980a)「大橋乙羽と画報雑誌」『文教大学女子短期大学部研究紀要』24号 P1～11 文教大学女子短期大学部
- 槌田満文 (1980b)『『風俗画報』目次総覧』龍溪書舎
- 槌田満文 (1997a)「『風俗画報』がCD-ROMになるまで」『學燈』第94巻4号 P22～29 丸善
- 槌田満文 (1997b)「国木田独歩と画報雑誌」『文教大学女子短期大学部研究紀要』21号 P40～49 文教大学女子短期大学部
- 永井荷風 (1950)「東京風俗ばなし」『葛飾土産』中央公論社
- 原田健一 (2010)「モノをめぐる渋沢敬三の構想力——経済と文化をつなぐもの——」『国際常民文化研究機構年報1』P29～41 神奈川大学国際常民文化研究機構
- 半藤一利、森まゆみ、関川夏央 (1996)「文豪たちの街角。漱石・鷗外・四迷と歩く」『東京人』No.106 1996年 都市出版
- 平出鏗二郎 (1899)『東京風俗志 上』富山房 (『東京風俗志 上』2000年 筑摩書房)
- 平出鏗二郎 (1901)『東京風俗志 中』富山房 (『東京風俗志 上』『東京風俗志 下』2000年 筑摩書房)
- 平出鏗二郎 (1902)『東京風俗志 下』富山房 (『東京風俗志 下』2000年 筑摩書房)
- 東陽堂編 (1898a)『風俗画報 (新撰東京歳事記 上)』第157号 東陽堂
- 東陽堂編 (1898b)『風俗画報 (新撰東京歳事記 下)』第159号 東陽堂
- 東陽堂 (1901)『風俗画報 (民間行事新年の祝)』第224号 東陽堂
- 福原菊治 (1911)『紳士の服装』関根商会高等洋服店
- 宮本常一 (1981)『絵巻物に見る日本庶民生活誌』中央公論社

- 民俗学研究所編 (1953)『年中行事図説』 岩崎書店
- 柳田国男編 (1974)『明治文化史 風俗編』 原書房
- 山口徹 (1997)「絵画・「モノ」史料論：史料学を考える一つの試み」『歴史と民俗：神奈川大学日本常民文化研究所論集』14 P 30～52 神奈川大学日本常民文化研究所
- 山下重一 (1969)「祖父重民のこと」『日本古書通信』34 (1) 日本古書通信社
- 山下重一 (1990)『風俗画報・山下重民文集』 青蛙房
- 山下重一、山本健二、山本紘運、槌田満文 (1991)「画報雑誌のパイオニア——風俗画報をめぐる——上・下」『日本古書通信』第56巻5号 P 8～11、6号 P 22～26 日本古書通信社
- 山本駿次朗 (1988a)「報道画家 山本松谷 -1-」『三彩』485号 P 64～70 三彩社
- 山本駿次朗 (1988b)「報道画家 山本松谷 -2-」『三彩』486号 P 76～85 三彩社
- 山本駿次朗 (1988c)「報道画家 山本松谷 -3-」『三彩』487号 P 128～134 三彩社
- 山本駿次朗 (1991)『報道画家 山本松谷の生涯』 青蛙房
- 山本松谷、木村荘八、安藤鶴夫、槌田満文 (1956)「明治の週刊紙“風俗画報”をめぐる(座談会)」『美術手帖』113号 P 109～118 美術出版社
- 吉田悦志 (1999)「『風俗画報』を散策する」『図書の譜：明治大学図書館紀要』3号 明治大学図書館紀要編集委員会
- 若月紫蘭 (1911a)『東京年中行事 上』 春陽堂(朝倉治彦校注『東京年中行事1』 平凡社 1968年)
- 若月紫蘭 (1911b)『東京年中行事 下』 春陽堂(朝倉治彦校注『東京年中行事2』 平凡社 1968年)
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2007)『『日本近世生活絵引』東海道編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2007)『『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』第2巻語彙編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2007)『『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』第2巻本文編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2008)『『日本近世生活絵引』北陸編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2008)『『日本近世生活絵引』北海道編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2008)『『東アジア生活絵引』中国江南編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2008)『『東アジア生活絵引』朝鮮風俗画編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2008)『『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻本文編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班 (2008)『『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻語彙編』 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究班 (2014)『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター